

## 幸田露伴「梶久物語」論

出口 智之

はじめに

江戸初期の新吉原において、紀伊国屋文左衛門や奈良屋茂左衛門などの伝説的な大尽が、華やかな遊びを繰広げた逸話はよく知られている。そうした彼らに先立ち、上方にも豪遊によって名の通った人物がいた。大坂の豪商、梶屋久兵衛である。遊女松山に熱をあげ、新町の遊郭に通いつめたあげくに落魄して狂死したという彼の生涯は、早くは井原西鶴が「梶久一世の物語」に描いたことによって世に知られ、以後様々なジャンルで多くの作品を生んできた。

この伝説的な、そしてだからこそ定型化された人物像は、明治になって幸田露伴の筆により新しい造型を与えられた。『文藝倶楽部』の明治三十二年一月号と三十三年一月号に分

載された、「梶久物語」がそれである<sup>(1)</sup>。

「梶久物語」は、明暦年間の京都において、陶工の清兵衛とその協力者の陶器商梶屋久兵衛が、「錦欄手」（色絵陶器）の焼成に成功するまでの苦心を題材にしている。露伴がその小説中に好んで職人を描いたことは有名であり、大町桂月は本作の連載中に、「例のお得意の職人小説」と評した<sup>(2)</sup>。しかし、その題名からも知られるように、本作は職人たる清兵衛ではなく、協力者である久兵衛を主人公としている。そのため、実際に制作にたずさわる清兵衛の苦心はさして描かれることがなく、むしろ作品の中心となっているのは、肥前藩の秘密である錦欄手焼成の秘法を久兵衛が盗み出すまでの策謀である。

先進者の技術を盗み取るこうした物語は、露伴の作品と

してはいささか珍しい。明治二十六年の「蘆の一ふし」に類例はあるが、これは友人の鑄金家岡崎雪声から聞いた、彼の少年時代の実話だったらしい。<sup>3</sup>ところが、椀久に関する右のような物語は、彼を描いた先行作品のいずれにも見られないのである。

では、露伴はこの「椀久物語」をいかにして着想したのであったか。あるいは、こうした物語が執筆される動機は、はたしてどこにあったのか。本稿は、露伴が執筆に際して用いた資料や参照した先行作品という側面から、「椀久物語」の成立経緯を明らかにし、そのなかに明治三十年代における露伴の文学活動の特色を探る試みである。まずは便宜上、本作の梗概を簡単に示しておこう。

久兵衛と清兵衛は、当時肥前でしか作られていなかった錦欄手（錦手）を京都でも製造することを計画し、試行錯誤を重ねていたが、失敗ばかりである。久兵衛の援助はあるものの、清兵衛は窮迫した生活が続き、弟子の庄左衛門と助左衛門の心も離れかかっていた。

一方、久兵衛は近來、島原の松山太夫にいれあげていた。母親の妙順が清兵衛のもとへ来て、卸した焼物の代金を受取りに肥前から青山幸右衛門が上京しているが、久兵衛が

帰らないので困っていると語る。いあわせた久兵衛は諄々といさめる母に反抗的な態度をとり、ついに勘当されてしまった。

これにより落魄した久兵衛は、知合いの幫間長八の世話で、松山に会いに行った。勘当が解けるまで会わずにいようという松山の提案に、久兵衛は不興をよそおい、彼女が田舎大尽からの身請け話を受けていることや、また別の客とはいかにも仔細ありげに会っていたことを言当てて、これを機に自分から離れるつもりだろうと責める。これに対し松山は、身請け話を隠していたのは無駄な心配をかけたまいとしたため、また先日客は父親の青山幸右衛門で、強引な身請け話に悩んでいることを打明けたところ、預った焼物の代金を流用してでも先に請出そうと言ってくれた、と明かした。ここまで聞いた久兵衛は、幸右衛門が父親ならば盗みの罪を犯さずとも、錦欄手焼成の秘法を教えてくれさえすれば、その費用という名目で後援者の金森宗和から金を借り、自分が身請けできると持ちかける。心配する松山を説きふせ、久兵衛は秘法を聞出す約束を取りつけた。こうして知りえた秘法によって、清兵衛は錦欄手の制作に成功した。実は久兵衛は、田舎大尽からの身請け話も松山と幸右衛門との親子関係もすべて知ったうえで、わざと

勘当されたのであった。それにより、窮地にあった松山に、久兵衛自身が身請けするには後援者から金を借りる以外にないと思わせて、そのための口実という名目で幸右衛門から秘法を聞出そうという計略だったのである。これに成功した久兵衛は、約束どおり松山を妻とし、焼物の代金を持って一度藩に帰った幸右衛門の上京を待っていた。ところが、錦欄手が完成してみなが喜んでいたところへ、彼が秘密を漏れたことが発覚して処刑されたとの報せが入る。久兵衛は自責の念に駆られ、完成した錦欄手を叩きこわして発狂してしまった。以上が、「腕久物語」の大略である。

ここであらためて問題を提起しておけば、腕久を扱った先行作品に類例が見られず、露伴の作品としてもいささか珍しいこうした物語を、彼はいかにして着想したのだろうか。次節ではこの問いを出発点に、本作の典拠となった資料を探ってみた。

## 一

柳田泉は「腕久物語」について、「作中の腕久や、清兵衛、幸右衛門のことが大概実録であることは、露伴が書いた『文明の庫』（明治卅一年一月以後、少年世界連載）の陶器の巻にも明白に見えてゐる通りだ」と指摘している。<sup>4</sup>この「文明の

庫」とは、露伴が少年むけに書いた陶器、紙、銃器、假名の発達史で、柳田が指しているのはその第一部「陶器の巻」に見える、次のような一節である。

仁清はもと丹波の人なりしが、年若き頃土佐の尾戸村にありて、帰化せる朝鮮人仏阿彌といふものに陶器つくることを学び、元和の頃京都に出で、宗伯に従ひ、技を以て仁和寺の宮に仕へしより仁の字を賜はるを得て、仁清と号したり。こゝに壺屋久兵衛といふ陶器商ふものありしが、当時肥前には既に陶器の彩画の法開けたるに閑はらず、京都にては猶錦手といふやうなる美しきもの作ることを能せざるを憾みとし、肥前の人にて青山幸右衛門といふ男と心安く交れるを幸として、其人の彩画金焼付の法を知るを、さまざまに頼み聞えて、少しづつ、洩し貰ひ、仁清に謀りて如何にもして美しき彩画金焼付のものを造り出さんと思ひ込みたり。仁清も自己が技藝わざぎの上の事なれば、及ぶほどの力を尽して、さまざまに工夫しけるが、名工の事なれば、一を聞て十をも悟りけん、終に其企画成就して、創めて美しきものを造り出しぬ。封建の制度のむづかしげに、同じ日本の中ながら此国彼国其主を異にして、自国の秘密を洩すことの堅く禁められたる折なれば、此事聞

えて幸右衛門は、自国の秘法を洩したる罪に行はれ、久兵衛はまた、幸右衛門の罪せられたる由を聞きて、気の毒なりとおもふ心の堪へがたさに発狂して遂に身歿りたりといふ。これはこれ寛永より少し後れて、明暦の頃の事なりとも伝ふ(後略)

これは、現在数々の国宝で知られている近世初期の陶工、野々村仁清についての記述である。ここに記されている、「壺屋久兵衛」なる陶器商が「青山幸右衛門」から「彩画金焼付」の法を聞出し、それをもとにして仁清が錦手の制作に成功したという逸話が、「枕久物語」の骨格になったことは明らかである。すなわち、本作に登場する清兵衛とはほかならぬ野々村仁清がモデルであったと知られるが、だとすれば露伴は、仁清に関する「文明の庫」のこの箇所をいかなる文献によって執筆したのだろうか。その文献こそが、おそらく「枕久物語」の出発点だったと考えられる。

こうした観点から、「文明の庫」以前に刊行されていた陶磁器についての文献を調査してみると、古賀静脩『陶器小志』の次のような記述が目にとまる。

仁清、通称を清兵衛と云ふ。丹波の人なり。壮年の時土佐国尾戸に至り、帰化の韓人仏阿彌に就き陶法を学ひ、元和中京師に來り、清閑寺の陶工宗伯の門に入り、

(中略) 其業を以て仁和寺の宮に仕へ、名を清左衛門と改む。宮賜ふに仁の字を以てす。因りて仁清と号す。(中略) 明暦年間、三條河原町の辺に陶器商あり。壺屋と呼び、又茶碗屋久兵衛と称す。時に肥前国有田の人、青山幸右衛門と云ふ者あり。商用の爲め数々來り、久兵衛と相善し。久兵衛、肥前の錦様の秘法を幸右衛門に聞き、之を仁清に謀る。仁清乃ち之を試製し、始めて彩画の法を得たり。幸右衛門は其後、自国産の秘法を他に伝へたる罪により、処刑の身となりしか、久兵衛之を聞き発狂せりと。

ここに含まれる情報の内容や提示の順序が、先に引いた「文明の庫」とほぼ重なっているのは明らかで、露伴はこの『陶器小志』に依拠して当該箇所を執筆したと考えられる。だとすれば、「枕久物語」もまた、『陶器小志』がその原点だったと言つてよいだろう。

とはいえ、「枕久物語」に描きこまれた清兵衛および久兵衛に関する詳細な設定は、『陶器小志』の情報量からまかないきれものではない。おそらく、露伴はこの書に加えて、田内梅軒『陶器考』の「附録」(以下『陶器考附録』と表記)をも参照したと考えられる。

『陶器考』の本篇は、「南蛮・安南・呂宋・高麗物などの

茶の湯における請来陶器の識別法が記され」た書物であるが、それとほぼおなじ分量を持つ『陶器考附録』では、日本産陶磁器の概略が述べられている。仁清の簡単な伝も立てられ（四〇ウ）、たとえば「椀久物語」に後援者として登場する金森宗和との関わりについては、「金森宗和二印ヲサツカリ茶器ヲ作ル」と記されている。また、作中で弟子の庄左衛門が「清水の三町目、三年坂下の西側」と語っている窯の場所についても、「清水サン子坂西側ノ窯ニテヤク」とあって、作中の記述と符合している。

しかし、より重要なのは、『陶器考附録』の巻末に採録されている「つほや六兵衛」なる人物による文書である。「京都焼物初り書」と題されたその文書には、「金焼の初り」という項目が存在し、次のように記されている。

明暦年中ニひぜん皿山より青山幸右衛門と申仁、登り被申候。先祖つほや九郎兵衛、此仁ニ右焼付ひたすら二頼み、神文画伝を請被申候。（三十五才）

ここには幸右衛門処刑の記事が存在せず、また壺屋の名前も「久兵衛」ではなく「九郎兵衛」となっている。しかしながら、彼が肥前から上京した青山幸右衛門に頼み込み、「金焼」の秘法を聞出したというこの簡潔な一段が、『陶器小志』に、ひいては「椀久物語」につながっているのは明

らかである。

「京都焼物初り書」と「椀久物語」との一致は、これだけではない。たとえばこの文書の冒頭には、執筆者六兵衛の「先祖」だという九郎兵衛が、陶器商として店を持つまでの経緯が次のように記されている。

夫より京都にて肥前焼売出し候藏元、つほ屋市左衛門と申仁、其家手代弥兵衛九郎兵衛と申兄弟遣ひ被居、此弥兵衛を京三條通河原町東角ニ右店出し付致、売出し候。後、此九郎兵衛ニみせ渡し被申、其手代、六兵衛と申、遣ひ居被申候。是、京都にて焼物商売之初めなり。

すなわち、九郎兵衛は兄の弥兵衛とともに「つほ屋市左衛門」の手代として働いており、弥兵衛が三條河原町に出させてもらった店を継いだと伝えられている。

一方「椀久物語」でも、久兵衛の母妙順が清兵衛に、椀屋の店は「大坂の大商人、市左衛門殿の助によつて仕出した」ものであり、それを久兵衛が兄の弥兵衛から受継いだと語っている。また、椀久の店の場所も作中に「三條の河原町」とあるうえ、椀久の手代は「六蔵」となっていて、「京都焼物初り書」の伝える「六兵衛」と似通っている。

さらに、この文書の「京焼物初め之事」の項には、仁清

の弟子が「庄左衛門助左衛門」であることが記されており、これも「梶久物語」とおなじである。これらの一致から、露伴が本作の執筆にあたって『陶器考附録』を資料として用いたことが推定できる。

一方、梶久と松山の物語については、西鶴の作とされる「梶久一世の物語」をはじめ、草双紙から浄瑠璃や長唄まで多数の先行作品が知られている。梶久の勘当や、ほかの大尽が松山を身請けする話も、そのいくつかに見えており、本作が下敷にした作品を一作に特定するのは困難である。ここでは、露伴は周知された物語の骨組を借りて、「梶久物語」に採り入れたとするのが妥当であろう。

また作中では、久兵衛を遊郭で笑いのにしようにという友人たちの計画を妙順が知り、かばってくれるよう松山に頼んだことから、彼の島原通いがはじまったという逸話が語られている。この逸話はまた、馬琴の「蓑笠雨談」(のち「著作堂一夕話」と改題)や西沢一鳳の「伝奇作書」などにも録されているが、その内容や行文はどれも大差なく、露伴がいずれを参観したかは確定しがたい。ここでは、彼が目にした可能性が高い文献として、半顔居士「梶久の話」(『しがらみ草紙』第七号)を示しておこう。

(梶久は——注) 年長るまで青樓等へ登りしこと有らざり

しに、其の朋友とも之れをあざみて、いかで梶久をそのかし遊廓に伴ひ行き、辱めをあたへて笑はんものと企てけり。梶久の母、竊かに之を聞き知りて深く憂ひしが、此頃松山太夫とて全盛の遊君は、情けを知れる婦人なりと聞き居れば、之れに頼みて我子の恥辱を免かれ得せんと、其よしをこまゝと文にした、めて、松山のもとへ送りぬ。(中略)(友人が梶久を——注)とある揚屋につれ行き、おのゝなじめる遊君どもを招きけり。梶久は母のをしへを守りて、松山太夫をまねきけるに、松山は(中略)梶久を見るより、最となれゝしく寄り添ひて、年ころ馴染重ねたるやう睦ましくあひしらひけり。(中略)此夜を始めとして、梶久は松山の情けに感し、深くもちきりを結びければ、遂に後の世までうき名を流すこと、はなりけり。三十九、四十頁

以上のような資料から、「梶久物語」の構想経緯はひとまず次のように推定される。すなわち、露伴はまず『陶器小志』の壺屋久兵衛と「京都焼物初り書」の九郎兵衛とを、青山幸右衛門に関する逸話を接点に同一人物と假定した。そのうえで、彼を著名な梶久と結びつけ、梶久に関する文献を参照してその設定を補強したのである。

しかしながら、壺屋久兵衛あるいは九郎兵衛が、どちら



も京三條河原町で店をいとなんだとされているのに対し、椀久を扱った先行作品や資料は、管見のかぎりでは彼を大坂の住人と伝えるものばかりである。松山に關しても同様で、「椀久物語」のように彼女を島原の太夫とした文獻は見当らなかった。では露伴は、舞台の異なるこの二つの逸話をつ結びつけるという発想を、どのようにして手に入れたのだろうか。

一つの可能性としては、壺屋久兵衛と椀久とを同一人物とする何らかの資料を、露伴が参照していたことが想定される。たとえば、三井高保が著した『工藝遺芳』<sup>9)</sup>を見てみよう。この書物は仁清について、『陶器小志』とおおむねおなじ内容を記しているが、しかし久兵衛の発狂についての記述のあとに、『陶器小志』にはない次のような一文が存在していた。

所謂演劇ニ仕組ミ演スル碗久ハ、此久兵衛カコトナリト云フ。  
(三十九頁)

もつとも『工藝遺芳』には、たとえば清兵衛が仁和寺の宮から仁の字を与えられ、仁清と号したという記述がないのに対し、「文明の庫」ではこの情報が、『陶器小志』とおなじ順序で記されているなどの点を考えれば、露伴がこの書を参照していたと断ずるのは早計であらう。のみならず、

『陶器考附録』を含めたいずれの資料にも、久兵衛が松山の恋心を利用して策略をめぐらしたという逸話は記されていない。では、久兵衛の策謀を中心とした「椀久物語」は、これらの資料からどのようにして導かれたのだろうか。それを露伴の独創とすることは簡単であらうが、本稿ではこの問題について、「椀久物語」ときわめて近似した内容を持つ樋口一葉の「うもれ木」との関わりから考えてみたい。

## 二

樋口一葉の「うもれ木」(『都の花』明治二十五年十一月、十二月)は、陶器の絵つけ職人を描いた作品である。一葉が男性を主人公にすることは珍しいうえ、一心に藝道に打ち込む職人という人物設定や漢語を多用した文体を持つ「うもれ木」には、露伴の作品からの影響が指摘されている。<sup>10)</sup>

一方、露伴は明らかに自分の作風を模倣したこの作品について、表だっては何も言っていない。しかしながら、「椀久物語」の構成や設定には「うもれ木」と重なる部分が多く、露伴は本作の執筆に際してこの作品を意識していた可能性が高い。ここで比較のため、「うもれ木」の概略を示しておこう。

この作品は、薩摩焼の絵つけ業をいとなむ入江籟三を主

人公とする。彼は粗製濫造が横行する世の中に背をむけ、注文も受けず、妹のお蝶と赤貧の生活を送っていた。ある日、籟三はかつての弟子で、今は実業家の篠原辰雄に出会い、親密な交際をはじめた。お蝶は辰雄が、先日高利貸から老婆を救っていた人物であると感じ、恋心を持った。

かねてから薩摩焼の衰頹を歎いていた籟三は、辰雄の資金援助で一对の色絵花瓶の制作に取組む。ところが、花瓶が完成した夜、彼は資金獲得のためにお蝶を利用しようとする辰雄の策謀を知り、愕然とする。一方、辰雄から金満家への貢ぎものとなることを求められたお蝶は、葛藤のすえ、遺書を置いて家を出ていった。絶望した籟三は、完成した花瓶を庭石に叩きつけてしまった。

こうした大略を見ただけで、「うもれ木」と「梔久物語」との相似は明らかであろう。まず、両作の題材はどちらも色絵陶器の制作であるし、高価な釉薬を多量に使うため、職人が経済的に困窮するという設定もおなじである。また、人物の配置も踏襲されていて、錦欄手の制作を志して日用の雑器を作ろうとしない職人清兵衛が入江籟三の位置にあり、窮乏する清兵衛を援助する商人久兵衛は篠原辰雄に相当する。清兵衛の妹でこそないが、久兵衛に恋心を寄せ、その思いを利用される松山はお蝶の役割を果していると言

えるだろう。

さらに、両作の相似は場面構成や細かな設定にまで及んでいる。たとえば、「うもれ木」の辰雄がはじめて登場する場面で、彼は次のように描かれている。

お蝶の肩さき摺るほどにして、猶豫もなくずつと出し男（中略）軽くふくむ微笑の色、まづ氣を吞まれて衆目のそ、ぐ身姿は如何に、黒絹の羽織に白地の裕衣、態とならぬ金ぐさり角帯の端かすかに見せて、温和の風姿が優美の相か、言はれぬ処に愛敬もある廿八九の若紳士。

（「うもれ木」第二回）

こうして姿をあらわした辰雄は、高利貸の取立に苦しむ老婆に金を与え、その窮状を救ったのであった。

一方「梔久物語」の久兵衛は、庄左衛門と助左衛門が師の清兵衛に対し、窯の窮乏についての不満を言立てる場面で登場して、二人に金を与えてなだめることにより清兵衛の困惑を救う。

懷中より、光るもの二片投げ出したる男は水際立つたる美男。金拵への小脇差、真黒扮装の上品なる拵へながら、何処やらに物好見えて野暮ならず。癪癖知る、眼尻のきれ、色白にして柔和なれど侮り難き風情あるは、今噂せし三條の河原町にて間口も広き茶碗屋の肆



を開き居れる久兵衛（後略）

〔「枕久物語」其二〕

ともに登場の場面で金を与えているのみならず、黒服に金の小物というよそおい、優美な美男という描写においても、二人が似通っているのは明らかだろう。

もつとも、こうした衣装は典型的な粹人の姿にすぎないかもしれない。では、「うもれ木」の籟三と「枕久物語」の清兵衛とが、ともに辰雄ないしは久兵衛からの生計の援助を謝絶する、次のような箇所はどうだろうか。

籟三片意地の質、人に受くる恵み快からねど、溺る、藝に我れと負けて、二十金の生地二拾匁の金箔、此処四五月の費用幾度の窯代、積もりし恩の深きが上、猶心づけの数数もうるさく、其都度に断わるを（後略）

〔「うもれ木」第七回〕

氣長に工夫さつしやれ、<sup>でき</sup>成るそれ迄遠慮は無いこと、勝手の都合は何とでも仕て進ぜうに（中略）無駄ぢやが些ばかり御預けして行きませう、と懷中<sup>ふところ</sup>を探るを清兵衛押し止め、いや、それには及ばぬ。（「枕久物語」其三）

両者の人物造型が近似しているのみならず、それが同様の描きかたで示されているのが見て取れる。

次に、お蝶や松山の説得を試みる、辰雄と久兵衛の言葉を比較してみよう。

天下に妻は（お蝶のほか——注）又なしと定めて、何の子爵の娘、振りむく処か、にべもなく断りしが蟻の一穴、（中略）其子爵殿今までの一壁<sup>ひだり</sup>にて、支出の金に事も欠かず、事業はこびかけし今日に成りて、俄かに破約の申込み。此道たえて又こと成らず、（中略）国家の末を思ひいたれば、残懷山のごとく此胸やぶる、ばかり。

〔「うもれ木」第九回〕

「うもれ木」の辰雄はこう述べて、お蝶への思慕から「子爵の娘」との縁談を拒絶したため、資金難に陥ったことを明かした。そのうえで彼は、お蝶の身と引替えという条件で、別の「貴顕」が資金提供を申出ていることに言及ぶ。ここには、現在の窮状が彼女への思いに起因することを訴えたうえで、自分はお蝶を「国家の為と断念<sup>あきらめ</sup>られ」ないが、しかし事業の「成否善悪はお心一つ」だと述べて彼女の自己犠牲を引出そうとする、奸智に長けた論理が展開されている。

ひるがえって「枕久物語」の久兵衛は、松山のもとへ通いつめたために勘当され、田舎大尽からの身請け話に対抗しようにも、金がなくなってしまうことをかこつ。彼は巧妙な誘導によって、錦手の秘法を教えてくれるように父である青山幸右衛門を説得する約束を、松山から取りつけ

るのであった。

京都で美しい色絵の陶器が出来れば京都の利益御代の利益、されば点茶の道に名高い金森宗和様も、一ト方ならず二人のために力を添へられ、(中略)斯くいふ仔細のあるなれば、久兵衛宗和様の処へ出て、肥前の人幸右衛門といふものより錦欄手の法を聞出すにつけ、差当金子拝借と願へば訳は無い談。(「枕久物語」其六)

逼迫した現状の原因をそれとなく女にも負わせ、彼女の行動によってのみ事態の解決が可能だとして、所期の目的を達しようとする両者の論理展開がおなじであるのは明らかだろう。また、辰雄が「国家」を標榜し、久兵衛が「京都の利益御代の利益」と言つて、ともにおのれ一人の利欲のためではないことを強調している点にも、彼らの言葉の同質性が見て取れる。

さらに、両作の結末にも明白な相似が存在する。「うもれ木」の掉尾には、みずからの制作した花瓶の美に陶醉し、狂気にとらわれる籙三が次のように描かれている。

思へば恨らみは我れにあり、腕にあり藝にあり此花瓶にあり。(中略)眺め入る心惚として、我れ画中に入りたるか、画図我が身に添ひたるか。(中略)吉野龍田の紅葉に花に、彼れも美なり是れも美なり、お蝶も美な

り辰雄も美なり、中に就て我が筆美なり。これを捨て、何処に行かん、天下万人みな明きめくら、見すべき人なし見せて甲斐なし、我が友は汝よ、汝が友は我れよ、いざ共に行かんと抱きあげて、投げ出だす一對庭石の上、憂然のひゞき大笑のひゞき、夜半の鐘声とほく引きて、残るものは片々の金光一輪の月。

(「うもれ木」第十回)

このように籙三は、花瓶の制作に執着した自分自身が結果的にお蝶の悲劇を招いたことを悔み、美の世界に没入していったうえで、最終的にその花瓶を破壊してしまうのである。

そして「枕久物語」の末尾にもまた、発狂した久兵衛が錦手の陶器を壊す場面が描かれている。

お葉ゆるして呉れ堪忍して呉れ、(中略)金欄手の陶器が親になるか、此壺が親になるか、此鉢が歟、ゑ、ゑ、真赤な贗せものぢや、踏み破せ、あれ鉢が飛ぶ、皿が舞ふ(中略)枕久は心から悪うは無いわい、天神様が御存じぢや、蝶々簪した小女がおらが大事の草花摘む、酒は雲から流れ出す、黄金は窯から湧いて、湧いて、あ、りやあ太夫様が錦欄手、と忽ち笑ひ忽ち泣き、壺皿鉢も踏み破壊し、正体も無くなつたりけり。

〔枕久物語〕其七

久兵衛は幸右衛門が処刑されたことを聞いて自責の念に駆られ、狂気して、陶器の図柄の幻覚にとらわれながら作品を壊してしまふ。かかる結末が、「うもれ木」に相即しているのは明らかである。

以上から、この両篇が多く共通点を有していることが知られる。これらがすべて偶然の一致とは考えがたく、露伴は「枕久物語」の執筆に際して「うもれ木」を参照していた可能性が高い。だとすれば、目的のために女の恋心を利用するという先行作品や資料には存在しない筋書も、「うもれ木」から借用されたものだったと推定できよう。

もつとも、こうした相似の一方で、職人である籙三を主人公にした「うもれ木」に対し、「枕久物語」の中心は策謀をめぐる久兵衛であるという相違は見やすい。また、結末の場面についても、「うもれ木」では狂気して作品を壊すのが制作者の籙三であり、他方「枕久物語」では策略を仕掛けた久兵衛であるという違いも看過できない。「うもれ木」との密接な関係を保ちつつ、そこにいささかの變形が加えられた本作の核心は、まさにこの相違にこそ存在している。

三

筆者はかつて、従来の「うもれ木」解釈、すなわち入江籙三とお蝶の兄妹が詐欺師である篠原辰雄にあざむかれる物語とする読解には難があることを指摘した<sup>1)</sup>。籙三は商品流通の経済に組込まれることを拒絶し、美と名誉の追求に自己の存在価値を見出していたのであり、「うもれ木」とはそうした彼が最終的に経済の枠組にからめとられ、自己を喪失してしまう物語であった。その悲劇は、籙三が博愛の士と狡猾な実業家という辰雄の両側面を見極められなかったことに起因しており、辰雄は慈善事業によつて名望を集めながら、実業家としても抜け目なく活動する人物にすぎない。

とはいえ、辰雄が資金集めのためにお蝶を犠牲にしようとしたことは、まぎれない事実である。少なくとも彼女の悲劇は、彼が引き起したものにほかならない。だが、辰雄は本当に、籙三の信頼やお蝶の愛情を裏切つてはばからない冷血漢として造型されていたのだろうか。

「うもれ木」の第三回を見てみよう。ある朝、ふと亡師の墓を詣でた籙三は、境内で辰雄に呼びとめられた。彼が師の金を持逃げたことを詰責する籙三に、辰雄は伏して詫

びている。ここからは、辰雄が籙三より早く寺に来ていたこと、また謝罪のため進んで籙三に声をかけたことが知られ、悔恨から「幾朝」も墓参りに来ていたという彼の言葉には信憑性がある。この場面には、過去の悪事を悔む辰雄の心情が垣間見えている。

ところが、おもに籙三に焦点化した「うもれ木」は、以後辰雄のめぐらす策略の詳細や彼の心情をつまびらかにしない。辰雄がお蝶を利用しようと思ひ出したばかりごとは、彼女の遺書において間接的に示唆されるのみであるし、またそうした策略を仕掛けるにいたり、さらにその結果としてお蝶の死を聞いたおりの辰雄の心中は、まったく描かれてはいない。こうした空白は、たしかに「うもれ木」に緊張と陰翳をもたらしているが、その反面で辰雄の人物像が不明瞭となっていることも否定できない。

これに対し、辰雄の位置にあたる久兵衛を主人公にした「枕久物語」が扱うのは、彼が仕掛ける策略の態と、それをめぐっての彼自身や利用される松山の心情である。すなわち、本作は「うもれ木」が空白としていた部分を中心に据え、いわば物語を裏側から描きなおした作品と考えられる。以下、こうした観点から具体的に作品を見てゆこう。

「枕久物語」の其三には、遊蕩をやめてくれるよう懇願す

る母親の妙順に対し、ことごとく反抗してみせる久兵衛の姿が描かれている。

へ、へ、へ、と冷笑ひ、お、気が狂ふた、気が狂ふた、気が狂ふたから意見云はしやるな。兎角伽羅の香が身に浸みぬ人等には恋の遺瀬無さの思ひ遣りがつかぬと見える。ハ、ハ、ハ、気の通らぬ金仏輩、関り合ふては涯が無い、あ、あ、あ、あ、と大欠伸す。(其三)

かたわらの清兵衛すらも嘔然とさせるその態度は、前述のとおり、わざと勘当されたうえで松山に苦衷を訴え、幸右衛門から秘法を聞出すという計略の布石であった。この時久兵衛が、本心から母に逆らっていたのではないことは、去つてゆく妙順に涙を流してわびる箇所暗示されている。

妙順の一町ばかりも行きたらんと思ふ時、久兵衛勃然と起き上り、母の去りたる外の方を打伏し拝みて、睜る眼に涙を溢らし泣き出したり。(同)

ここには、策謀をめぐらす久兵衛の胸中が示されている。また其六には、久兵衛の勘当が解けるまで会わずにおり、年季があけるのを待つて一緒になろうと提案する松山が、自分を疑う久兵衛に対し、心中を切々と訴える言葉が記されている。

口惜や、胸の丹誠を取り出して視する仕方であらざれ

ば、疑はれては釈くも慵く、真実郎の爲になる事とは更に思はねど、(中略)死んで、退けて仕舞ふて、生命を懸くると云ふことを伊達には云はであつたよなと、此世の間の人々に云はせたいやうな氣にもなる、……なれども何の、何の、……あゝ頭が痛む、氣が狂ひさうな、……何の其様な脆い氣になつて、大切の郎にみすゝ死神憑かすやうな愚なこと仕てなるもの歟。

(其六)

こうした松山の心につけこんで、久兵衛は自暴自棄をよそおい、彼女が幸右衛門の外聞をはばかりて隠していた親子關係を語らせようとする。

落ぶれた男には来るなといふ、余所の男へ身を受けらるゝ相談は近々に逼りながら知らぬ顔して居るといふ、何やら胡乱な男とは泣いてしみぐ潜やかに物語るといふ。これと云ひ彼と云ひ照らし合はせて考へて見れば阿房でも、汝が綺麗に透き徹るやうな胸のものが其で無いものかは大概悟るに手間取らぬ。賢い人や、傾城様や、名誉の女楠木様や、天晴分別立ての利益不利益で、貧な男に来るなとは、好う出来ました出来しました。

(同)

久兵衛の態度に耐えかねて、彼女はついに、先日会いに

来た「胡乱な男」とは父親の幸右衛門であつたことを明かした。これを聞いた久兵衛は驚きをよそおい、彼が父親だつたならば苦境を打開する方法があるとして、錦欄手の秘法を聞きだそうとするのであつた。

汝の父様の真実二人を可憐いと思ふて下さるなら其に及ばず、身を暗うさるゝにも及ばいで、済む分別の無いでは無し。さ、汝の怪むは道理なれど、汝の父様は肥前の人、一寸した事を汝になり又此の久兵衛になりと内々にて教へて貰へば其で済むこと。

(同)

このように、全体がほとんど二人の対話によつて構成され、そのなかに久兵衛の計略や彼らの心情をつぶさに描き出した其六は、幸右衛門と松山の身の上話をまじえつつ展開し、作品全体のほぼ半分を占めている。また、「うもれ木」のお蝶の心情は遺書のなかで簡単に示されるばかりだったのに対し、松山は多くの言葉を費やして心中を語っているという対比も明瞭であり、本作がこの対話によつて、「うもれ木」の物語を裏側から捉えなおしていることは明らかだろう。

「うもれ木」の変奏たる本作の性格は、結末部分にも見て取れる。「腕久物語」の其七、幸右衛門処刑の報に接した久兵衛が発狂する場面に描かれているのは、公共の利益を謳

った事業の背後に存在する、個人の感情を利用したうえ裏切ることさえ辞さない非情さと、策略を仕掛けるために感情を圧殺せねばならなかった人間の葛藤にはかならない。「うもれ木」の結末が、そうした社会や経済の構造に押しつぶされた人間の悲劇を扱っていたとすれば、おなじように掉尾に配された陶酔と狂気の一節によって、本作は「うもれ木」が描かなかった辰雄のがわの胸中に焦点を当てていたのである。

こうした本作について、柳田泉は「椀久が松山をぢらしめて真音をはかせる口説の詰め開きは、実に人情分析の微に入つたものであらう」と評し、植村清二もまた、「この作品の中心は、それぞれの人物の巧緻を極めた会話に、その心情をさながらに写したところにある。(中略)やはり何といつても島原の揚屋での椀久と松山とのデアアローグが作中の圧巻である」と絶讃した<sup>13</sup>。かかる評価を見るかぎり、策謀をめぐる久兵衛と松山の思いを描く試みとして、「椀久物語」は一応の成功を収めていると言つてよい。しかしながら、「うもれ木」によって着想され、その空白を充填するように構成されていた本作は、逆に多くの空隙を抱えこんでしまつてゐたのである。

## おわりに

「椀久物語」には叙上のごとく、出発期の一葉が露伴の作風を摸して書いた「うもれ木」を、当の露伴がさらに利用して、その物語を裏面から描いたという関係が見て取れる。かかる事実は、両者の関係を考えるうえで興味深いものであるが、しかし「椀久物語」に視座を置く立場からは、その理由を穿鑿することがさしたる有意性を持つとは思えない。むしろ重要なのは、高い評価を受ける久兵衛と母の妙順との対話(其三)や松山との対話(其六)などが、「うもれ木」の空白を充填するという着想による部分だったことが明らかに became 時、逆にそれ以外の部分に含まれる空隙が際立つてくることである。

たとえば、これまで述べてきたように、久兵衛は清兵衛の錦欄手焼成を扶けるため、幸右衛門から秘法を聞出す目的で松山を利用したと考えられる。しかしながら、それは状況からの推察にすぎず、彼の意志は最後まで語られていない。またその策略にしても、幸右衛門が父親であることや、田舎大尽からの身請け話で窮地に陥っていることなど、松山が隠していた事情をすべて事前に知っている必要があるが、彼がいつ、どのようにその情報を掴んだのかも不明



である。植村清二はほかに、「心に奥のある」椀久が揚屋通ひに大尽を極めることや、それが義理を立て、母親から勘当を受ける仕打など、細かい点で多少難を入れる余地もないことはあるまい」と指摘している。<sup>14)</sup>

こうした筋立上の不整合のみならず、本作の結末には、その存在が当然予期される様々な場面が描かれていない。たとえば、久兵衛が秘法を聞出したことや清兵衛がそれにより工夫を重ねたことなどは、「久兵衛が聞き出したる端緒を追ふて清兵衛が工夫やうやく熟し」(其七)と記されるのみで、前半に描かれた苦難を重ねる清兵衛の姿は立消えとなっている。また、久兵衛が松山を身請けした顛末も一切語られず、其七に「今は茶碗屋の女房なれど何処やらにまだ媚めける色の見ゆるも憎からぬお葉(松山の本名——注)」(同)と記されるにとどまっている。さらに、この場面には妙順も登場しているが、彼女が久兵衛といつ和解したのかも不明である。そして何よりも、久兵衛の発狂を記したあと、本作の大尾に置かれたのは次のような簡単な一節であった。

お葉は父を失ひし上、夫には狂気者となられたれど、身の薄命を悲むのみ、更に心を外らしもせず、只管夫を介抱せしが、其真心天に通じてや、程経て椀久正気になり、睦じく遂に添ひ遂げしとぞ。

(同)

全体がきわめて短いうえ、こうした簡略な記述に終始する其七は、久兵衛と松山との対話を描いた長大な其六にくらべ、あまりに淡泊な印象を与える。柳田泉もこれについては、「もう少し長い入り組んだ物語りとなるべきであつたらしく、結末にや、急いだやうな気味があり、そこはいさ、か嫌らないものがある」として、いささかの不満を述べている。このように見てみると、本作は「うもれ木」の変奏としてその構成に大きくよりかかっており、「うもれ木」で脱落していた部分こそ綿密に綴られていたが、ストーリーラインに関わるそれ以外の部分では省筆が目立つことがわかる。<sup>15)</sup>

一方、すでに明らかにしたように、本作の設定には多くの資料が用いられていた。これは一見、虚構の物語をさも本当らしく演出する小道具にも思えるが、しかしそうした情報の多くは些細な記述に反映されるのみで、作品にリアリティを与えるほどの効果を持つてはいない。そもそも、露伴は文献を参照したことをまったく明かしていないため、たとえば庄左衛門と助左衛門の名が史書に依拠していたことなどは、読者に知られようはずがなかったのである。

ところが、久兵衛と松山との対話を描く其六には、文献資料がまったく援用されていない。もっとも、幸右衛門が

松山の父であることやそれにまつわる身の上話、あるいは久兵衛の計略自体、みな假構だったと考えられるから、それはさして奇とするには及ばない。だが、だとすれば露伴は、かならずしも資料を参照する必要なくして「うもれ木」を翻案できたことになる。では本作の執筆にあたって、なにゆえにかくも多くの資料が用いられねばならなかったのか。おそらくそれは、「枕久物語」が実在の人物を扱った歴史小説であつた点に関わっている。

露伴はこの明治三十年代前半、続けざまに何作かの歴史小説を完成させていった。その一つである「二日物語」（明治三十一年・三十四年）には、「枕久物語」と重なるいくつかの特徴が見て取れる。たとえばこの作品は、旅路にある西行が崇徳院の亡霊やかつての妻と邂逅する物語であるが、仏道と情念をめぐる彼らの対話が作中で大きな比重を占めており、「枕久物語」と近い構成になっている。また、「二日物語」には「雨月物語」「西行一生涯草紙」「山家集」「撰集抄」ほか多くの文献が引用されており、その意味でも両作は似通っている。露伴は「二日物語」のこうした手法について、記述に「よりどころ」を求める厳格な意識を表明しており、「枕久物語」に援用された多くの資料もかかる意識のあらわれだったと考えてよいだろう。

西行と対話の相手以外の人物がまったく登場しない「二日物語」に対し、「うもれ木」の筋立を枕久松山や仁清の物語に応用し、資料によってその設定を補強した本作において、露伴はより複雑な構造を持った歴史小説を試みたようである。ところが、「二日物語」がその簡潔な構造によって高い完成度を示していたのに対し、本作が人物の心情を描く発話の部分にこそ多くの筆を割いていたものの、前述したような空隙を抱え、とりわけ後半部においては「二日物語」と同様に、対話を核にした作品に終わっていることは興味深い。これは、露伴の小説的構成力の不足とも解しえるが、しかし歴史小説に関するそれまでの発言において、実在した人物を勝手な想像で動かすことへの忌避が繰返し述べられていたことを考えれば、むしろ歴史小説において、虚構世界を指向する小説言語と彼のかかえる自己規範との折合いをいかにつけるかという問題に関わっていたと見るべきであろう。

露伴はまた、同時期の「帳中書」（『新小説』明治三十一年九月・十二月）では、用いた文献を冒頭に引用し、さらに物語の内容がその資料から切離された虚構であることを強調したうえで、はじめて物語を語り起すという迂遠な方法を用いていた。これら一連の作品はすなわち、歴史小説におい

て典拠となった資料をどのように提示するか、あるいは作品のなかに必然的に混入する虚構との関係をいかに処理するかという問題への、試行錯誤の結果にほかならない。本作には、以後多くの作家たちが直面することになる、歴史小説に内在する事実と虚構の緊張関係に対する先駆的な取り組みが示されていたのである。

## 【注】

- (1) 明治三十三年一月の掲載分は、本作の後半に相当するが、初出時には節の番号が其一から其三とされていた。これは、本作が『露伴叢書』（博文館、明治三十五年六月）に収められた際に、通し番号の其五、其七にあらためられている。本文引用には初出を用いた本稿でも、便宜上、この通し番号を採用した。
- (2) 大町桂月「新年の文壇」（『文藝倶楽部』明治三十二年二月）、二百十二頁。
- (3) 塩谷贊「幸田露伴」上（中央公論社、昭和四十年七月）二百三十三頁。
- (4) 柳田泉「幸田露伴」（中央公論社、昭和十七年二月）、三百三頁。
- (5) 幸田露伴「文明の庫」（『少年世界』明治三十一年三月号掲載分）、四十頁。
- (6) 古賀静脩「陶器小志」（仁科衛、明治二十三年五月）、十四、十五頁。
- (7) 本稿では、東京大学総合図書館蔵本を用いた。「陶器考」は明治十六年刊。「附録」は別冊となっており、丁数もあらたまっている。よって本稿では、「附録」の部分を『陶器考附録』と表記した。
- (8) 岡佳子「国宝 仁清の謎」（角川書店、平成十三年七月）、二十二頁。
- (9) 三井高保『工藝遺芳』（三井高保私家版、明治二十三年四月）。
- (10) この点に関しては、山根賢吉「一葉と露伴」（『大阪学芸大学紀要』昭和四十一年二月）・坂本政親「一葉と露伴」（『福井大学教育学部紀要』昭和四十一年十月）などを参照されたい。
- (11) 拙稿「樋口一葉「うもれ木」論」（『国語と国文学』平成十九年七月）。
- (12) 柳田前掲書、三百三頁。
- (13) 植村清二「二日物語」枕久物語「風流魔」（『露伴全集 月報』第十四号、岩波書店、昭和二十五年十二月）、七頁。
- (14) 植村前掲論文、七頁。
- (15) 柳田前掲書、三百三頁。
- (16) この詳細については、平田由美「評釈『二日物語』上」（『人

文学報』昭和六十三年三月）および拙稿「幸田露伴『二日物語』論——歴史と虚構の狭間で——」（『国語と国文学』平成十八年四月）を参照されたい。

(17) 幸田露伴「沼田平治宛書翰 明治三十九年六月十日付」（沼田穎川『註釈二日物語』、東亜堂、明治三十九年六月）。

(18) 幸田露伴「因明縁起おことわり」（『庚寅新誌』明治二十五年十二月・幸田露伴『雪紛々』引（春陽堂、明治三十四年一月）など。

\*引用に際しては、初出を用いた。また、原則として常用漢字・人名用漢字の字体を用い、適宜句読点を補い、パラルビにあらためた。